

プラハ道中記—ICFIA'99 に出席して—

群馬大学工学部 板橋英之

1999年6月20日から25日まで、チェコ共和国のプラハにおいて、ICFIA'99がJAFIAの第35回FIA分析講演会と合同で開催された。この会議には日本から10名以上が参加したが、「道中記はわけもんが書きゃえ〜んじゃ」ということで、筆者を含め数人が執筆候補者に挙げられたが、最年少参加者の手嶋氏（愛知工大）が「ぶんせき」誌に書くことになったため、ブービー年齢の筆者が本誌の担当となった。本会議の正式な内容等は「ぶんせき」誌の記事をお読みいただくとして、ここでは個人的な道中記とさせていただきますことをご了承願いたい。

なお、日本からの参加者（敬称略）は本水昌二（岡山大）、酒井忠雄（愛知工大）両団長をはじめ、今任稔彦（九大）、小熊幸一（千葉大）、

河島拓治（筑波大）、佐藤生男（神奈川工大）、讃岐三之助（サヌキ工業）、関達也（日産化学工業）、手嶋紀雄（愛知工大）、成澤芳男（成澤計算科学研）、樋口慶郎（東京化成工業）、山根兵（山梨大）、著者（群馬大工）および同伴者3名の計16名である。

〔プラハ到着〕 成田組と関空組に分かれて日本を発った一行（今任・佐藤両氏は別ルート）は、10時間以上のフライトを経てフランクフルト空港で合流し、プラハへと向かった。97年フロリダで行われたICFIAのときは、ダブルブッキングによりデトロイト空港で10時間以上も足止めを食らうというハプニングに見舞われたが、今回は予定通りにホテルに到着した（ただ、讃岐氏の予約が入っておらず、一同野宿を覚悟し





たが、空室があったため難なく全員入室できた)。ホテル名は「クリスタルホテル」。御殿のようなホテルを連想していたが、さにあらず、大学の「セミナーハウス」を彷彿させる部屋であった。ベットは硬く、バスタブもない。それもそのはず、もともと大学の研修施設であったものをホテルに改装したものであることが判明した。「まあ一飲んで寝るだけじゃからえーじゃろー。贅沢ゆうとったら、ばちがあたるでー」ということで、一同納得し、本ホテルを根城とした。実際、飲んで寝るだけだったことはいうまでもない。

【プラハ観光】 会場が古都プラハということもあり、オプションツアーも多数用意されていた。酒井団長の指示で、一同すべてのツアーに申し込み毎晩（昼間は当然学会に参加）のようにダウンタウンに繰り出していった。プラハは町そのものが美術館のような佇まいで、豪華な彫刻をあしらった建物がいたるところに見られた（ただ、落書も多く、町の景観を損ねていたのが残念であった）。プラハ城、カレル橋、ピアホール等強く印象に残っている。中でもプラ

ハ広場のレストランには驚かされた。歩きつかれた一行は食事をとろうとレストランを探したが、どこも満席で入れない。ただ 1 軒だけ、がららの店があった。怪しいとは思ったが、観光地のだ真ん中にある店だから大丈夫だろうと思い、入店した。席についてあたりを見回して、やたらと人の写真が多く飾ってあるのに気が付いた。よくよく見るとそれらはすべて、スターリン、ブレジネフ、カストロといった共産主義指導者の写真であった。「わしら一日本人じゃからだいいょぶじゃろー」という、意味不明ではあるが FIA 指導者の心強い一言で、とりあえずビールと食事を注文した。ビール、食事とも味はなかなかで「これはえー店に入ったな」と一同満足していたが、「えれー店」の間違いであった。会計の金額がやたらと高い。店員（身長 190cm のスキンヘッドのおにーちゃん）に個々の品の値段を聞いたところ、ビールの値段が市価の 10 倍近くもすることが判明した。「まちごーてるかもしれんから、もう 1 度聞いてみー」ということで恐る恐る筆者が聞きにいったが、法外な値段の書いてあるビールのメニュー

を見せられ、すごすごと退散した。筆者ではなく、ヒトラーライクな酒井先生が聞きにいったら、対応が違っていたかもしれない。いずれにしても、今となっては良い思い出である。なお、移動はすべて徒歩+地下鉄+路面電車という経済的なものであったため一同大変疲れていたが、ホテルに到着後は、毎夜、団長部屋でその日の反省会が行なわれた。先日山梨で行われた「第3回 FIA 技術講習会」は、この反省会で開催することが決まったことを付記しておく。[学会会場] 学会は我々のホテルから歩いて数分のところにあるチャールズ大学体育学部の一室で行われた。そこは舞台のある天井の高い広い部屋で、椅子、机とも立派なものであった。我々一行はその最前列に陣取り、壇上の演者に熱い視線を送ることとした(筆者の場合、英語がよくわからないので OHP から内容を読み取るためと、連夜の反省会で疲れきった肝臓に活を入れるためである)。口頭発表は4日間で開催講演も含め37件行われ、日本からは筆者を含め5人が発表した。筆者の発表の座長は酒井先生ということで、あらかじめヤラセの座長質問をお願いしていたが、発表が終わるといきなり酒井先生が質問をはじめたため、その質問がヤラセであることはバレバレとなった。質問の最中、筆者と酒井先生の顔を見比べながらニコニコしていたクリスチャンの顔が印象的であった。一方、ポスター発表は計70件で、国別内訳はスペイン19件、日本8件、チェコ7件、ドイツ4件、ポルトガル4件、ギリシャ4件、ベネズエラ4件、ポーランド3件、アルゼンチン3件、ロシア2件、キューバ2件、南アフリカ2件、その他8カ国から1件ずつとなっており、アメリカ合衆国で行われていたこれまでのICFIAとは異なり、ヨーロッパからの参加が多いのが特色である。非英語圏からの参加が多か

ったせいか、ディスカッションはジェスチャーあり、筆談あり(筆写だけだったかもしれない)の白熱したものとなった。特に、スペインの Balearic Islands 大学のミロ氏(筆者と同年くらい?)には筆談も交え懇切丁寧に説明してもらった(おかげでこの日のポスターはこの一件しかみることができなかった)。ミロ氏とは懇親会でも意気投合し、手嶋氏とともにスペインのマヨルカ島に遊びに来いと誘われた。彼との筆談を交えた奇妙な会話は大変楽しい思い出である。

[プラハの食事] 純日本的な食生活を送っている筆者にとって、海外(特にアメリカ)での食事に良い思い出は少ないが、プラハの食事は比較的口に合った。豚カツは日本のオリジナルな食べ物と思っていたが、チェコの伝統的な料理にそっくりなものがあるのには驚いた。むしろソースは辛口で筆者の口には大変あった。ただ、ホテルの朝食と昼食は、ほとんど毎食同じようなメニュー(昼食の残りが翌朝の朝食にでる)であったため、少々飽きがきた。それにひきかえ、ビールは安くて(ジョッキ1杯80円程度)旨く、飽きが来なかったのはいうまでもない。

以上、委員長命により執筆させて頂いたが、極めて私的な道中記になってしまったことを深くお詫び申し上げます。アカデミックな内容に関しては「ぶんせき」誌を参照して頂ければ幸である。なお、次回(FLOW ANALYSIS VIII)は2000年の6月にポーランドのワルシャワで開催されるが、本水、酒井両団長をはじめ、樋口氏、手嶋氏、筆者等足軽隊も参加予定である。より多くの方とご一緒できればこの上ない幸せである。最後に、今回の参加者一行は、会議終了後プラハを立ち、ライン川経由で無事日本に帰って来たことをご報告申し上げます。